

主 題：忠実な同労者がもたらす励まし②

聖書箇所：コロサイ人への手紙 4章10-11節

テーマ：パウロの働きを支えた同労者たちはどのような人物だったか？

○パウロの忠実な同労者たち：

今朝、一緒に見ていきたいのは、コロサイ人への手紙4章のみことばです。先週から私たちは忠実な同労者がもたらす励ましについて、この4：7-14を中心に学び始めました。普段読んでいる時は余り気にも留めないような手紙の終わり、最後のあいさつの部分かもしれませんが、しかし、そんな部分が私たちに教えてくれていたことは非常に大切なことでした。その続きをきょうも考えてみたいと思います。まずはいつものようにみことばをお読みします。前回の内容を思い出しながら、それぞれ神様のことばを見てください。

コロサイ4：7-11

「：7 私の様子については、主にあって愛する兄弟、忠実な奉仕者、同労のしもべであるテキコが、あなたがたに一部始終を知らせるでしょう。：8 私がテキコをあなたがたのもとに送るのは、あなたがたが私たちの様子を知り、彼によって心に励ましを受けるためにほかなりません。：9 また彼は、あなたがたの仲間のひとり、忠実な愛する兄弟オネシモといっしょに行きます。このふたりが、こちらの様子をみな知らせてくれるでしょう。：10 私といっしょに囚人となっているアリストアルコが、あなたがたによろしくとっています。パルナバのいとこであるマルコも同じです——この人については、もし彼があなたがたのところに行ったなら、歓迎するようにという指示をあなたがたは受けています。——：11 ユストと呼ばれるイエスもよろしくとっています。割礼を受けた人では、この人たちだけが、神の国のために働く私の同労者です。また、彼らは私を激励する者となってくれました。」

さて、きょうの内容に入る前に、前回学んだことを改めて思い返してみてください。私たちは、パウロの働きを陰で支えていた8人の同労者たちについて一緒に考えています。この8名は、だれもが知るような有名な人物ではありません。いつも表舞台に現れるような物語の主人公でもありません。彼らは一見何でもない、普通に思える目立たない働き人たちでした。でもそのような見えない者たちの働きこそパウロにとって決して欠かせないものになりました。普通に思える者たちの忠実さや熱心さが彼を励まし、みことばや福音の前進に大きくつながることとなるのです。そして先週、特にそのうちの最初のふたりを一緒に見ました。ひとり目に見たのはテキコでした。彼はみずから喜んで犠牲を払い、いつでもだれかの必要を満たす準備ができていた、神様と人々に仕える人物でした。また、ふたり目に見たのはオネシモでした。彼は確かに救われる前、大きな罪を犯しました。それでも神様の恵みによって救われ、新しく造り変えられた彼は神様と人々に役に立つ者となった人物でした。余り触れていなかった、余り知らなかったそんなふたりだったかもしれません。でもどちらもすばらしい信仰者たちでした。

でもこれですべてではありません。残り6人います。その半分の3人の姿をきょうは一緒に考えてみたいと思います。どんなすばらしい模範がここに記されているのか、そのことを自分の歩みと照らし合わせながらぜひ一緒に考えてみてください。

3. アリストアルコ 10 a 節

では早速3人目の同労者の姿から考えてみましょう。パウロとともに仕えた3人目の人物は、アリストアルコでした。10節の前半を見ると、簡潔に「私といっしょに囚人となっているアリストアルコが、あなたがたによろしくとっています。」と記されています。これを読んで気づいたかと思いますが、アリストアルコはここで、コロサイの兄弟姉妹によろしくとあいさつを送っていました。つまり先に見たテキコやオネ

シモとは違って、彼はこの時も変わらずパウロと一緒にいたということです。パウロの現状を伝える任務を託されて旅立って行ったふたりとは違い、アリストアルコはローマに残って軟禁されていたパウロのそばを離れることはなかったのです。

そもそもこのアリストアルコという人物はいったいどんな存在だったのでしょうか？新約聖書を通して、全部で5回しかその名前が出てこない以上、詳しいことはわかりません。私たちも普段彼のことは余り気にも留めないでしょう。ただそれでも、パウロにとってこの人物がどんなに大切だったかをみことばは少なからず教えてくれています。なのでアリストアルコとパウロの間に、どんな関係があったのかを一度振り返って考えてみましょう。最初に彼の姿を見て取れるのが使徒の働き19章で、先週テキコを学んだ時にもこの19章について少し触れましたが、パウロはこの時、第三次宣教旅行の真ただ中にありました。パウロはその旅行の途中に立ち寄ったエペソの町でみことばを大胆に教え、さまざまな働きをなし、この地域に大きな影響を及ぼしていたのです。例えば19：10を見ると、その影響がわかります。10節に「これが二年の間続いたので、アジアに住む者はみな、ユダヤ人もギリシヤ人も主のことばを聞いた。」と書いていました。また、少し先の20節にも「こうして、主のことばは驚くほど広まり、ますます力強くなって行った。」と書いていました。この地ですばらしい働きが行われていたことを思い浮かべることができます。パウロを通して、主のことばがますます広がって行って、多くの人たちがキリストを信じ、救いへと導かれていったのです。

でもどんな時代も同じです。主の働きがなされる時には、それをよく思わない、それを阻もうとする者たちがいます。このエペソにおいても同じでした。特に当時、人々の間で熱心に礼拝されていた大女神アルテミスを祀る神殿の模型を作っていた者たちが、自分たちの商売が妨害されていると、パウロに激しい怒りを燃やしました。そしてその結果、町中で大きな騒動が起こったのです。パウロは非常に危険な状態に置かれることになりました。でも同時に、彼以外にも問題は及んでいきました。その時の様子が今見ている19：28-29にこんなふうにかかれていています。「：28 そう聞いて、彼らは大いに怒り、「偉大なのはエペソ人のアルテミスだ」と叫び始めた。：29 そして、町中が大騒ぎになり、人々はパウロの同行者であるマケドニア人ガイオとアリストアルコを捕らえ、一団となって劇場へなだれ込んだ。」と。パウロだけではなく、パウロの同行者までもが危険な目に遭ってしまいました。いや実際、アリストアルコは人々によって捕らえられ、劇場へと連れて行かれたのです。ちなみにここで「捕らえ」と訳されていることばには、「無理やりにつかむ」とか「乱暴に捕らえる」といった意味が含まれています。あのステパノに対して、民衆などが取っていた行動として、使徒6：12に「また、民衆と長老たちと律法学者たちを扇動し、彼を襲って捕らえ、議会にひっぱって行った。」と書かれていました。この「襲って捕らえ」ということばが、今私たちが見た使徒19章と同じことばが使われています。すると、少し想像してみてください。この時、パウロに同行していたアリストアルコは優しく捕らえられたのではありません。怒りと憎しみに駆られていた人々に襲われて、乱暴に劇場へと引きずられて行ったのです。間違いなくいのちの危険を感じたことでしょう。パウロと働きをともにした結果、アリストアルコは文字どおり死にかけました。恐れや不安を覚えても当然だったでしょう。このまま彼について行けば、どんなにひどい困難や苦しみが待っているのかわからないと、彼のもとを去って行ったとしてもおかしくはなかったでしょう。

ではそんな彼はどうしていたのかと言うと、使徒20：4に「プロの子であるベレヤ人ソパテロ、テサロニケ人アリストアルコとセクンド、デルベ人ガイオ、テモテ、アジア人テキコとトロピモは、パウロに同行していたが、」と記されてきました。アリストアルコは死にかけた後も、パウロのもとを去ることはありませんでした。たとえ自分の身に危険が迫ったとしても、彼はパウロのことを心から愛し、そして彼につき従っていました。そしてエペソを離れてエルサレムへと向かおうとしていたその旅路においても、彼はほかの兄弟と一緒にあってパウロのことを支え続けていたのです。アリストアルコという人物は、自分が仕えやす

い時だけでも、自分が仕えたい時だけでもない、大変な時でも変わらず愛する者に喜んで仕えようとする者でした。

また加えて、そんな彼の姿を私たちはほかの箇所でも目にすることができます。同じ使徒の働き²の27章を見ると、ここでは先ほど見た第三次宣教旅行を終えて、エルサレムへと無事にたどり着いたパウロは人々に捕らえられ、カイザリヤで裁判を受け、その後ローマへと連れて行かれることになるのですが、その時の様子が記されていました。27：1-2に「:1 さて、私たちが船でイタリヤへ行くことが決まったとき、パウロと、ほかの数人の囚人は、ユリアスという親衛隊の百人隊長に引き渡された。:2 私たちは、アジアの沿岸の各地に寄港して行くアドラミテオの船に乗り込んで出帆した。テサロニケのマケドニヤ人アリストルコも同行した。」と書いています。アリストルコは彼に同行したのです。そして、ローマに行くこの旅路も決して楽なものではありませんでした。パウロたちの乗った船が途中で嵐に巻き込まれ、彼らは死にかけたのです。何十日もの間、海の上を漂い続けた挙句、彼らの船は最後に座礁もしました。人々は恐怖と大きな失意を抱きました。アリストルコも苦しい思いをしたでしょう。彼はパウロとともにいた結果、一度だけではなく、今回も死にかけたのです。今度こそ彼のもとを離れたとしても、何らおかしくはなかったでしょう。しかし、それでもなお彼はパウロのもとにとどまり続けました。

ローマに無事に着いた後、自宅で軟禁されている間も、そしてコロサイの兄弟姉妹へ手紙を書き送っていたその時も、アリストルコは変わらずにパウロのそばにずっといたのです。これはすごい忠誠心だと思いませんか？ いったいどれほど彼はパウロのことを思っていたのでしょうか？ だからこそパウロもコロサイ4：10で彼のことをこう呼んでいました。「私といっしょに囚人となっているアリストルコが」と。これは恐らくアリストルコ自身が実際に囚人になっていたという意味ではありません。彼自身が何らかの犯罪を犯して牢屋に入れられていたというわけではなく、彼は捕らえられていた囚人パウロといつも生活をともにしていました。どんな時も彼のもとを決して離れようとしませんでした。たとえ困難や大変さが伴う時であっても、神様を何よりも愛していた彼は、同じ神様を愛している兄弟のために喜んで仕えていました。そしてそれゆえに、パウロにとってアリストルコはいつも、どんな時も、自分とともにいて囚人となっている、そんな心を励ます存在となっていたのです。

少し立ち止まって一度考えてみてください。果たして私たちが神様や人に仕えるその姿は、今どんなものでしょう？ 神様や兄弟姉妹に仕えようとしていく時、今の私たちはアリストルコのようにいのちの危険に直面するようなことは多分ないでしょう。でも仕えることにはいろいろな犠牲が伴います。自分の時間や体力だけではありません。だれかに仕えていこうとすれば、自分の快適な生活を犠牲にしなければいけないかもしれません。自分自身の優先すべきことを横に置いて、自分の考えや思いを横に置いて、だれかの問題や重荷と一緒に背負って、さまざまな困難に直面することもあるかもしれません。いろいろな難しさが伴うのです。それでも私たちは変わらずにみずから仕えようとしているのでしょうか？ 仕えやすい時だけではありません。仕えたい時だけでもありません。問題が降りかかってきた時に距離を取るのではなくて、愛をもってどんな場合であろうとも互いに励まし合いながら、仕え合っているのでしょうか？ かつて箴言の著者もこんなことばを残していました。箴言17：17に「友はどんなときにも愛するものだ。兄弟は苦しみを分け合うために生まれる。」とあります。皆さんはどんな時にも自分を愛してくれる友を持っていますか？ どんな時も苦しみを分かち合ってくれる、そんな友を持っていますか？ そして自分自身がそんな友になろうと歩んでいるのでしょうか？ 自分にとって都合のよい時、簡単な時だけではありません。どんなに大変な時であっても、変わらずに愛する者のために仕えようとした人物、それこそが3人目のパウロの同労者アリストルコでした。

4. マルコ 【ヨハネ・マルコ】 10b節

次に、パウロとともに仕えた4人目の同労者を考えてみましょう。4人目はマルコでした。10節の後半を見ると、このように続いていました。「パルナバのいところであるマルコも同じです——この人については、

もし彼があなたがたのところに行ったなら、歓迎するようにという指示をあなたがたは受けています。——」と。ここでバルナバのいとこであるマルコ、別の名をヨハネ・マルコとも呼ばれる人物が登場していました。そしてここで彼の名前が挙げられていたということは、ある意味非常に驚くべきことでした。というのもこのヨハネ・マルコは過去に大きな過ちを犯した、いや何よりもパウロのことをひどく傷つけた兄弟だったのです。彼らの間に起こった出来事を思い返すために、使徒の働き 13:2-5 を見てください。

「:2 彼らが主を礼拝し、断食をしていると、聖霊が、「バルナバとサウロをわたしのために聖別して、わたしが召した任務につかせなさい」と言われた。:3 そこで彼らは、断食と祈りをして、ふたりの上に手を置いてから、送り出した。:4 ふたりは聖霊に遣わされて、セルキヤに下り、そこから船でキプロスに渡った。:5 サラミスに着くと、ユダヤ人の諸会堂で神のこばを宣べ始めた。彼らはヨハネを助手として連れていた。」とあります。主に召されたバルナバとパウロのふたりは、この時第一次宣教旅行へと送り出されたところでした。ふたりは船に乗ってキプロス島へと渡り、そしてサラミスでみこばを宣べ伝え続けていたのです。そしてその旅に同行していたのがバルナバのいとこであった若いヨハネ・マルコでした。ふたりの働きを支える助手として彼は一緒について行っていたのです。

しかしその旅の途中であることが起こりました。続く 13 節にこのように言われています。13 節「パウロの一行は、パポスから船出して、パンフリヤのペルガに渡った。ここでヨハネは一行から離れて、エルサレムに帰った。」と。マルコは旅の途中で勝手に帰ったのです。いったいどうして帰ったのか理由はわかりません。彼にとって宣教旅行が余りにも厳し過ぎたのかもしれませんが。さまざまな困難や苦しみを前にして、恐れや不安を覚え、もう耐え切れなかったのかもしれませんが。しかし理由はどうであれ、大切な務めを任されていたにも関わらずその働きを放り投げて、マルコはパウロのもとから逃げたのです。そして彼のとったこの行動は、後に大きな結果をもたらすことにつながりました。今見ている 13 章の続きを見て行くと、第一次宣教旅行は終わり、使徒の働きの 15 章に進んでみると、今度は第二次宣教旅行を計画していたパウロとバルナバの姿を見て取ることができます。そしてそんな彼らの姿が特に 36-40 節に次のように描かれていました。「:36 幾日かたって後、パウロはバルナバにこう言った。「先に主のこばを伝えたすべての町々の兄弟たちのところに、またたずねて行って、どうしているか見て来ようではありませんか。」:37 ところが、バルナバは、マルコとも呼ばれるヨハネもいっしょに連れて行くつもりであった。:38 しかしパウロは、パンフリヤで一行から離れてしまい、仕事のために同行しなかったような者はいっしょに連れて行かないほうがよいと考えた。:39 そして激しい反目となり、その結果、互いに別行動をとることになって、バルナバはマルコを連れて、船でキプロスに渡って行った。:40 パウロはシラスを選び、兄弟たちから主の恵みにゆだねられて出発した。」と書いています。悲しいことに、パウロとバルナバの間に激しい議論が生じていました。前回と同様、自分自身のいとこを連れて旅に出ることを提案するバルナバに対して、パウロは反対したのです。以前途中で帰ったあの不誠実で、不忠実なマルコを今回も一緒に連れて行くことは絶対にあり得ない、私たちに裏切った信頼できない者をどうして再び大切な主の働きに同行させることができるでしょうかと。こうしてバルナバとパウロの間には言い争いが起こり、結果的に彼らは別行動をとることになりました。この時のマルコは、パウロにとっては何の役にも立たない、ただ不誠実な者でしかなかったのです。

私たちがこの背景を覚えた時に、そんなマルコの名前が今回の手紙の中に記されていたのです。パウロがコロサイの兄弟姉妹に手紙を書き送った時、マルコはともにいたのです。すごいと思いませんか？いったい彼の身に何が起こったのでしょうか。そのことについては、私たちは詳しくはわかりません。でも間違いなくマルコのうちに神様が働き、彼は自分の犯した罪や弱さを正直に認めて心から悔い改めていました。傷つけたパウロに対しても、許しを乞うていたことでしょうか。こうしてかつてバラバラだったふたりは和解しました。かつて信頼できなかった兄弟は、信頼することのできる兄弟へと変えられました。そしてもっと言えば、そのようにして大きく成長したマルコは、パウロにとって最も役に立つ同労者のひ

とりになったのです。皆さんもご存じのとおり、Ⅱテモテを記した時、パウロはもう自分の身に死が、終わりが迫っていることをわかっていました。そしてそんな状況の中で、彼はテモテに向かってこんなことばを書き送っています。Ⅱテモテ4：11に「ルカだけは私とともにおります。マルコを伴って、いっしょに来てください。彼は私の務めのために役に立つからです。」と書いてあります。これはすごい変化だと思いませんか？マルコは以前パウロをひどく悲しませた人物でした。旅を途中でほったらかした不誠実な兄弟でした。しかしそんな人物も神様によって変えられ、パウロにとって役に立つ者に、死ぬ間際にもう一度会いたいと言わせる存在になったのです。

またもう一つ付け加えるのであれば、私たちが持っているこの聖書の中にある福音書の一つ、マルコの福音書を書き記したのもこの人物でした。大きな失敗を過去に犯した人物は恵みによって成長し、神様と人々に役立つ仕える者へと変えられたと言うのです。そしてそれゆえに、パウロの手紙の中でコロサイの兄弟姉妹にこんなことばを口にしていました。10節の終わりに、「この人については、もし彼があなたがたのところに行ったなら、歓迎するようにという指示をあなたがたは受けています。」と。想像できません？パウロを信頼していたコロサイの信仰者たちは、かつてパウロとマルコの間に何が起こったのかを耳にしていたでしょう。もしそんなマルコが自分たちのところにやって来るようなことがあれば、ある者たちは冷たい態度をとったかもしれません。私たちのところには来ないでくださいと、受け入れることを拒んだかもしれません。だからこそパウロはあえて彼らに向かってこう口にしていたのです。もしマルコがあなたの方のところに来るのであれば、拒むのではなくて、彼のことを歓迎してあげてくださいと。関係はもう修復しました、彼は大きく成長しました。だから喜んで彼を受け入れてあげてくださいと。

さて、マルコの姿を今一緒に考えてきました。私たちは、こんな彼の歩みからすごく大切なことを学べると思います。マルコは私たちと同じひとりの信仰者でした。確かにキリストによって救われていた者でした。しかし、そんな彼も大きな罪を犯し、深い悲しみや傷を周りの者に与えることがあったのです。今の私たちも同じです。信仰生活において、これまでに大きな過ちを犯してしまった人も私たちの中にはいるでしょう。またこの先にも、私たちは失敗を犯し、ほかの人を失望させてしまうようなこともあるでしょう。でもたとえそうであったとしても、そこには希望があるということです。過ちや失敗を犯したとしても、それですべてが終わりではないということです。もし罪を認めて心から悔い改めるのであれば、そこに赦しや和解というものが存在します。神様や人の役に立つために再び働きをなしていくこともできます。神様の恵みの力によって、砕かれ、成長し続けていくそんな者を、神様はご自身の栄光を現すために用い続けてくださるのです。

私たちは先週、オネシモのことも考えました。オネシモは救われる前に大きな過ちを犯した人物でした。しかし、そんなオネシモも変えられ、神様の役に立つ者として働きに遣わされました。マルコは救われた後、大きな過ちを犯しました。でもそんな彼も心から悔い改めたからこそ、働きのために神様は用いられました。また、それだけではありません。旧約聖書でも、姦淫と殺人を犯したあのダビデも心から悔い改めたからこそ神様はあわれみ、続けて彼を用いられました。イエス様を三度知らないと否定したあのペテロも、心から悔い改めたからこそ神様はあわれみ、福音の働きのために続けて用いられました。今の私たちも同じです。私たち自身も神様のあわれみをへりくだって求めることができます。そしてこの神様の恵みがあり続ける限り、失敗や過ちはそこで終わりではないということです。私たちにとっても、すばらしい励ましだと思いませんか？過去に大きな失敗を犯し、大きな傷を負わせながらも、恵みによって大きく変えられ、神様の働きのために役に立つ者となった人物、それこそがパウロの4人目の同労者マルコでした。

5. ユストと呼ばれるイエス 11節

そしてきょう最後に見る、パウロとともに仕えた5人目の同労者はユストと呼ばれるイエスでした。11節は「ユストと呼ばれるイエスもよろしくと言っています。」、こう始まっています。残念ながらこのユストと呼ばれるイエスについて、私たちには何もわかりません。これまでに見てきたアリストルコやマルコとは違い、彼に関することはこの箇所を除いて聖書の中にいっさい出てきません。ですからユストという人物は、私たちには見えない部分でパウロのために働いていた信仰者でした。公の場には出てこない、目立たないような陰の働き人でした。もしかしたら多くの人たちは彼の存在など気にも留めなかったかもしれませんが。でも同時に、そんな同労者こそパウロの働きにとって大きな力と励ましを与えた存在でもあったのです。11節の続きにこう記されています。「割礼を受けた人では、この人たちだけが、神の国のために働く私の同労者です。また、彼らは私を激励する者となってくれました。」と。ここで言う「割礼を受けた人」というのは、救われたユダヤ人信仰者のことです。「この人たち」というのは、今まさに私たちが見てきた3人、パウロとともにいたアリストルコ、マルコ、ユストと呼ばれるイエスを表していました。つまりほかのふたりもそうですけれども、ユストという人物はユダヤ人の同労者だったのです。

ただこれを聞いても、今の私たちは何も思わないかもしれません。ユダヤ人、それがどうかしたのでしょうかと、大したことはないように思うかもしれません。でもユダヤ人であるユストがパウロに忠実につき従っていくというのは、決して容易なことではありませんでした。なぜかという、当時、パウロのことをだれよりも憎んでいたのは同胞のユダヤ人たちでした。実際、エルサレムに到着した彼が捕らえられて、ローマに連れて行かれるきっかけとなった暴動を引き起こしたのもユダヤ人たちだったのです。その時の様子が使徒の働き21章にこんなふうに記されていました。使徒21:27-28、30に「:27ところが、その七日がほとんど終わろうとしていたころ、アジヤから来たユダヤ人たちは、パウロが宮にいるのを見ると、全群衆をあおりたて、彼に手をかけて、:28 こう叫んだ。「イスラエルの人々。手を貸してください。この男は、この民と、律法と、この場所に逆らうことを、至る所ですべての人に教えている者です。そのうえ、ギリシヤ人を宮の中に連れ込んで、この神聖な場所をけがしています。」……:30 そこで町中が大騒ぎになり、人々は殺到してパウロを捕らえ、宮の外へ引きずり出した。」と書かれています。パウロは余りにもひどい目に遭っていました。彼自身は同胞の人たちに対しても重荷を負って、キリストの福音を熱心に宣べ伝えようとして続けていました。しかし、それでも彼らはそれを受け入れなかったばかりか、何度も何度も彼のことを殺そうとまでしていたのです。そんなパウロに、同じユダヤ人の信仰者であるユストがついて行こうとしたら、間違いなく彼も人々の標的にされたでしょう。裏切り者として扱われ、社会的な立場も失い、周りの者たちからいのちさえねられ続けることになったでしょう。パウロとともに主の働きに励んでいくというのは、文字どおり大きな犠牲を伴うものだったのです。

それでもなおユストは彼とともにいました。かつて愛した仲間や友や家族でさえも自分から離れていったとしても、すべてを失うことになったとしても、ユストは愛するパウロと一緒に歩むことを選択したのです。だからこそパウロはこんなことばで表現しています。コロサイ4:11の最後を見てみると、「また、彼らは私を激励する者となってくれました。」とあります。ここで用いられていた「激励する者」ということばには、「だれかのそばで励ます」とか、「元気づけること」、また「慰めること」といった意味が含まれています。ユストはパウロのことを慰め、そばで元気づける存在だったのです。パウロにとってユストはどんなに大きな励ましになっていたでしょう。まるで同胞のすべてが自分に敵意を燃やしているかのように感じる中で、まるで同胞のすべてが自分から去って行って、自分に対して殺意を燃やしているかのように感じる中で、パウロも弱さを覚え、失望を抱くこともあったでしょう。でもそんな時に、変わらずにいつもそばにいて、慰めを与え続けてくれるその存在はどんなに心強かったでしょう。確かにユストは表舞台には登場しない、まさに裏方のような存在だったかもしれません。多く人の目に留まるような、大きなことを成し遂げなかったかもしれませんが。しかし、そんなひとりの信仰者の忠実さが、パウロを力強め、そしてその心に大きな励ましを与えていたのです。

私たち自身の歩みにも、このような励ましを与えてくれる兄弟姉妹が必要ではありませんか？かつての信仰者のように実際にいのちをねらわれることはなかったとしても、私たちも信仰のゆえに葛藤や難しさを覚えることはあります。自分には理解できない状況に置かれて、恐れや不安を覚えるようなことや、罪との戦いに敗北し、自分の罪深さに打ちのめされて、希望を見出せなくなるようなこともあるかもしれません。救われた後の信仰生活にもさまざまな困難が数多く待ち受けているのです。みんな同じです。でもそんな時にこそ、いつもともにいてくれる兄弟姉妹がいるのであれば、そばにいて神様を見上げて一緒に歩いていこう、そう励めてくれる信仰の友がいるのであれば、それこそが大きな励ましになるのです。パウロにとってそれがユストでした。今の私たちも同じです。私たちも互いに励め合いながら歩いていくことができます。そのような兄弟姉妹が、そのような信仰の友がいるのでしょうか？そしてそのような者へと自分自身が変わりたいと、そのような者になっていきたいと、そう歩んでいるのでしょうか？私たちは互いが必要です。支え合いながら歩いていくことができるのです。だれにも知られていないような、そんな陰の働き人でありながら、どんな時もその働きを忠実に励まし続けた人物、それが5人目のパウロの同労者、ユストと呼ばれるイエスでした。

さて皆さん、私たちはきょう3人の同労者の姿を考えてきました。自分にとって、どんな大変な目に遭ったとしても、変わらず仕え続けたアリストアルコ、過去の過ちを心から悔い改めて、役に立つ者として成長したマルコ、たとえ人目につかない部分であったとしても忠実に働いて励ましとなったユストと呼ばれるイエス。確かに彼らはいつも表舞台に現れるような物語の主人公ではありませんでした。私たちと同じように、いろいろな弱さを覚えることもあり、困難や苦しみを味わった普通の信仰者でもありました。でも同時に、彼らはパウロを愛し、そして何よりも神様を愛していたからこそ自分のすべてをささげようとしていたのです。そしてそんな者のうちに神様は働いて、キリストの福音を宣べ伝えるパウロの大切な働きを支え、その励ましとして、その同労者として用いられていたのです。小さな部分にいつも忠実であったからこそ、神様はそんな者を大きな働きのために用いられました。果たして私たちは今、小さなことに忠実であり続けているのでしょうか？私たちは今、神様に対してどんな愛を持っているのでしょうか？そして、どのような愛でもって私たちは周りに仕えようとしているのでしょうか？すばらしい信仰者の模範をきょうもみことばから見ました。そんな彼らの歩みにならって、今週もますます主を愛し、喜んで仕える者としてともに歩いていきましょう。